

相互扶助の精神の下に活動する国際医療ボランティアAMDAに勤めて15年。国内外の災害支援活動に携わってきた。それでもこんなことが自分の身に起きるとは、まさに「想定外」の出来事だった。

2年前の熊本地震。私の故郷・熊本県益城町は最大震度7を観測した。前震の翌日の2016年4月15日に現地入りし、避難所となっていた母校・広安小学校の保健室を救護所にして医療支援活動を行うことになった。その夜、総社市とAMDAの合同支援チームが到着。そして16日に本震が起こった。

朝を待ち、チームと共に宿泊先から母校へ向かった。車窓の風景はこれまでとは一変し、何が起ったのか、私の頭は現実を受け止めることを拒絶していた。

そんな中、度重なる余震にもひるまず、多くの方々が駆け付けてくださった。送り出す側の不安はいかばかりであったか。さらに深い思いを添えてAMDAに送られてきたたくさんのご支援。今でも心の中で「ありがとう」と手を合わせている。

あの時から、母校の校歌で「美

AMDA理事 難波 妙

一日一題

相互扶助から生まれるもの



◇筆者紹介(なんば・たえ)ノートルダム清心女子

大文学部英語英文学科卒。2003年6月から国際医療ボランティアAMDAで国内外の緊急医療支援活動や復興支援活動に携わっている。11年6月から現職。14年6月からGPP(世界平和パートナーシップ)支援局長も務める。熊本県益城町出身。総社市在住。54歳。

しい郷」とつたわられる益城町は、被災地の代名詞となった。故郷の人たちは、深い傷をいたわり合いながら明日への希望を紡ぎ出している。

無くしたものは計り知れないが、確実に残ったものはある。復興への「願い」「感謝」「希望」。試練を共有した後のこれらの思いは、目には見えない。「相互扶助」の精神で支え合ったり、「ありがとう」の言葉を掛け合ったりする中で生まれ、立ち上がるうとしている人たちに不屈の原動力を与えてくれる。

AMDAがこれまで多くの方々に支えられてきた事実を自らが被災し、今更ながらに強く実感している。